

発達の違いを伴う不登校児童生徒への教育相談の在り方

—発達障がいの特徴を踏まえた相談対応の手引きの開発—

特別支援・相談課

平山 隆恵 板東 郁美 村部 穰

田中 清章 嶋田 聡 福崎 久美 廣島 慎一 大久保秀昭

要 旨

不登校問題の解決には、早期に適切な支援を行うことが重要である。本研究では、発達障がいの特性を踏まえ、具体的な支援方法について示した「相談対応の手引き試作版」（平成27年度）を検証し、見直しを図った。その過程で、教育相談の最初の段階において、不登校の背景にある発達の偏りについての的確に聞き取り、特別支援教育の視点から問題を焦点化して支援を行っていくことの大切さを再認識できた。さらに、不登校の要因や背景を的確に把握し、児童生徒の特性に合った適切なアドバイスをするために、「相談受付シート」、「ナビゲートシート」、「アドバイスシート」から構成される「相談対応の手引き」を作成した。

キーワード：教育相談、不登校、発達障がい、特別支援教育

I はじめに

徳島県立総合教育センター特別支援・相談課（以下当課）で行う教育相談の中で、最も多いのは不登校に関する相談である。徳島県教育委員会が作成した「段階別不登校ハンドブック」（2013）等を基にして、不登校には児童生徒の発達の偏りが関係している場合があり、その際には支援方法をさらに焦点化していく必要があるのではないかと考えた。

平成27年度の研究においては、文献研究により「発達障がいのある児童生徒が不登校になるリスクの高さ」、「自閉症スペクトラム、ADHDといった障がいと不登校の関連性」が明らかになった。また、教育相談担当が「背景に発達の偏りが感じられる」と推測した過去の事例について、「通常の学級に在籍している特別な支援を必要とする子どものチェックシート」（2006）（以下、「つまずきチェックシート」）を用いてチェックを行ったところ、対人関係領域において困り感が多いことが分かった。このことから、発達の偏りを示す不登校児童生徒に対し、早期に適切な支援を行うことが不登校の予防や長期化からの回復につながると考え「相談対応の手引き試作版」を作成した。

平成28年度は、「相談対応の手引き試作版」の課題を明確にして、さらに活用できるものにしていくための研究を進めた。「不登校児童生徒への支援の在り方について（文部科学省、2016）」では、「発達に課題があり、集団になじめない場合や対人関係のスキルが不足している場合」も不登校の要因や背景の一つとして取り上げている。そして、要因や背景を的確に把握し、適切な支援対策を講じる必要性と関係諸機関がアセスメントに基づいた支援計画を共有し、組織的、計画的支援を行うことの重要性を指摘している。このことから、本研究は、発達の偏りを伴う不登校児童生徒を支援する一助になると考える。

II 研究目的

発達に偏りを伴う不登校児童生徒への適切なアドバイスを行うための方策として、平成27年度に試作した「相談対応の手引き試作版」の検証を行う。具体的には、相談者のニーズに対応できるか、及び特別支援教育の視点を加えてアドバイスを行うために活用できるかという2つの視点から検証する。そして、このことにより、当課における相談活動の充実につなげる。

III 研究の実際

1 よりよい「相談対応の手引き」作成をめざして

昨年度試作した「相談対応の手引き試作版」は、「つまずきチェックシート」を用いた実態把握により明らかになった不登校生徒が示しやすい発達障がい行動特徴4領域20項目について、特別支援教育の指導方法を導入した対応を示したものである。この対応について、今年度具体的な事例をもとに、「不登校」の予防に視点を置いて支援の方法を示したものが図1の「相談対応の手引き試作版2」である。これを試行した結果、「手引きを使う場面と対象が不明確で使いにくい。」「示した事例と対応が発達に偏りを伴う児童生徒の不登校予防につながるかということについては検討不足である。」「具体的な事例を挙げての対応より、まず、誰が相談を受けても的確なアドバイスができるようにナビゲートしていく手引きが必要である。」という3点が課題として挙げられた。

当課は特別支援担当と教育相談担当の2班から構成される。教育相談担当は相談を受けたとき、まず、不登校に悩む保護者や児童生徒、教員等当事者の気持ちに寄り添って、不登校の現状を把握し当事者が今のリソースを生かして何ができるかを考えている。また「段階別不登校ハンドブック」及び「子どもたちを“いじめ”から守りぬくために」(徳島県教育委員会)に示された対応のヒントや手順を基に相談を行ってきた。

しかし、不登校の相談の背景に発達の偏りと具体的なアドバイスを求める相談者のニーズを感じたときに、十分な対応ができないことが課題であった。そこで、図2に示したように、教育相談の流れを見直し、カウンセリングの視点に特別支援の視点を加え、相談者の気持ちとニーズに

不登校の始まり？ちょっと気になるこんな様子

③友達を考える「ふつうのこと」ができず、1人になったBさん

うちの娘が仲間外れにされて学校に行きたくないと言っています。前まで一緒に遊んでいた友達が娘を避けて、外に行ってしまったらしいんです。「何もしていないのに、みんないじわる。」と娘は泣いています。一体どういことですか。

担任の先生は早速、その友達に話を聞いてみました。
「だって、Bちゃん、遊んでる途中で急に遊ぶのをやめるんだよ。」
「ゆずってあげても『ありがとう』も言わないし、もう遊びたくないよ。」
友達は「ふつう」だと思っている『ごめんね』『ありがとう』も言えていませんでした。遊びをやめたのは、理由があったようですが、説明できていませんでした。

不登校にならないためにどんな対応ができるでしょうか。

「知っていて当たり前」のことも「知らないかも？」と考えて関わります。ルールやマナーは理由を添えて、教えます。スキルを身につけて友達と関わることは、楽しい学校生活につながります。

誰に？	どんな対応？
Bさんに	「ゆずってもらったときには『ありがとう』って言おうね。そうすると、友達は、またBさんと遊びたくなるんだよ。」 「遊びをやめるときは『ごめんね、やめるね。』と友達に言いましよう。途中でやめると人数が足りなくなるとみんなが困るから、謝って理由を言った方がいいよ。」 「上手に言えたね。お友達がここにこしていたよ。」
友達に	「今、Bさんは、『ありがとう』や、途中で遊びを抜けるときの声のかけ方を練習しています。Bさんがうまく言えたら、先生に教えてね。」 「明日の休み時間、先生も一緒に遊ぶからね。」
学級で	学級活動の時間に、SSTカード*を使って友達の作り方を練習する。Bさんだけでなく、教師も周りの友達もルールやマナーを身につけて、モデルとなる。
保護者に	「Bさんが辛い気持ちになっていたことに気づいておらず、すみません。明日、一緒に遊んで様子を観察してみますね。」 「お友達もBさんも気持ちが通じなかったようなので、学級で『ありがとう』『ごめんね』の言い方について、練習していきますね。」

図1 相談対応の手引き試作版2

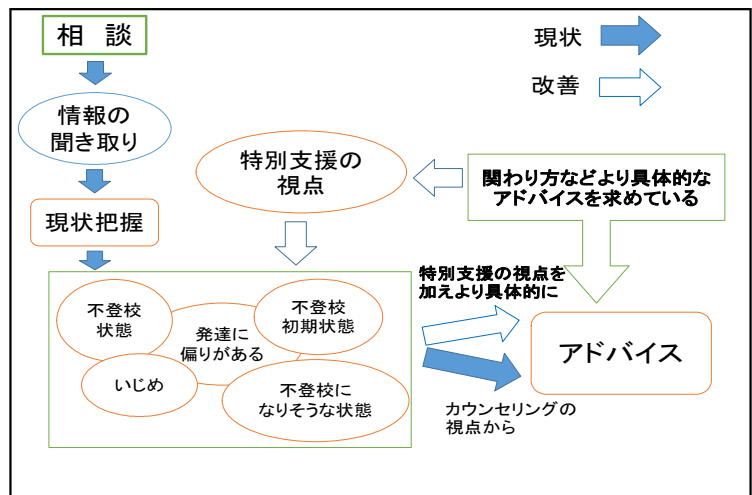


図2 改善を加えた教育相談の流れ

沿った教育相談ができるようにしたいと考えた。そのために、特別支援担当と協議し、より具体的なアドバイスができるように次の3種類の相談シートの作成を行った。

- (1) 相談受付シート・・・実態把握の観点を通達の領域別に示し、聞き取り時に使うもの
- (2) ナビゲートシート・・・各項目のアドバイスシートへナビゲートするもの
- (3) アドバイスシート・・・対応の仕方や関わり方のポイントを示したもの

2 特別支援教育の視点を活用する

(1) 実態把握をするためのポイント

実際の相談場面において、発達の偏りを伴う不登校の児童生徒への対応をスムーズに行い、相談者のニーズである事態の悪化や不登校を未然に防ぐためには、これまでの対応に加え、特別支援教育の視点を加えることが大切であると考えられる。

そこで、まず特別支援担当のそれぞれが相談場面を振り返り、どのような観点で実態把握を行っているのかについて情報を収集した。それをもとに、特別支援教育の経験が浅い場合でも実態把握を正確に行うには、どのような視点で領域別に整理することが必要なのか、さらにはその下位項目としてどのような観点が必要なのかについて検討を加えた。そして、それらをまとめたものが、表1の聞き取りのポイントである。

表1 聞き取りのポイント

運動面の発達	言葉の発達	対人関係	学力	本人	学校での様子	家での様子	地域資源
粗大運動	理解	友だち	全体的な学力	好きなこと	友だちの関係	過ごし方(内容)	療育
微細運動	会話	トラブル(内容)	得意な教科	嫌いなこと	トラブル	過ごし方(時間)	相談機関
協調性	語彙量	トラブル(頻度)	不得意な教科	困っていること	行事の参加	過ごし方(場所)	習い事
		トラブル(場所)	特記事項	自己理解	学校の対応	過ごし方(外出)	その他
		困っていること		効果的な支援	休み時間の過ごし方	友だち関係	
				幼少期の様子	教員との関係	家族の関わり	
				服薬	支援体制	困っていること	
					困っていること		

(2) 具体的なアドバイスにつなげるためのポイント

相談を担当する者にとって必要なスキルは数多くあるが、その獲得に多くの経験や幅広い知見を要するものとして具体的なアドバイスを行う際の引き出しの多さが挙げられる。具体的なアドバイスを必要としないものもあるが、対応の仕方や関わり方のポイントを伝えることで、相談者が安心するケースも少なくない。

特に、特別な支援を必要とする児童生徒の多くは、家族や教員などが適切な関わりをすることで「学ぶ楽しさ・人と関わる大切さ」を感じることができると考えられている。

そこで、特別支援担当のそれぞれの担当者の相談場面におけるアドバイスの例を収集し、観点をまとめ、共通の領域別に整理を行ったものが図3「アドバイスのポイント」である。

これは、後述するアドバイスシートに活用している。

領域	ポイント	具体的手立て
運動面の発達	運動苦手	<input type="checkbox"/> 手先の不器用さ → 細かな動きだけでなく大きな動き(外遊び、遊具を使う)を取り入れる。 <input type="checkbox"/> 気持ちを話したり状況をうまく伝えられない → ゆっくり聞く。 → 興奮しているときは時間を置いてから聞く。 → 先生や周りの友だちからも聞く。 <input type="checkbox"/> 大人が間に入り、ぎっかけをつくりたり橋渡ししたりすることも必要。 <input type="checkbox"/> わからないということを伝えられない子どももいます、言葉で伝えるだけでなく、写真や絵を使ってわかりやすく伝えたと理解できるということもこともあり
言葉の発達	話すことが苦手	<input type="checkbox"/> 何につまずいているか確認する。 → 内容がわからない。 → たくさんの指示が覚えられない。 <input type="checkbox"/> 指示は一つずつ。 <input type="checkbox"/> できたらほめる。 <input type="checkbox"/> できた！経験が増えていくよ心がける。 <input type="checkbox"/> 一方的に指示するだけでなく、本人が自分で考えて選択できる場面を作る。 <input type="checkbox"/> 言葉での指示が分かっていない → 分かりやすい言葉で再度伝える事が理解を促す。
	指示理解苦手	<input type="checkbox"/> 適切な行動が増えることによって、相対的に問題行動は減る。 → 適切な行動を見つけて、スモールステップで成功体験を積みあげると。 → 適切な行動がでてきたら、すかさず褒めて強化する。 <input type="checkbox"/> 問題行動を無視、もしくは無反応で対応(消去)すると、一時的に増えまる(バースト)。 しばらくしたら、減ってくるので一時的に増えても心配しない。 <input type="checkbox"/> 問題行動の目的(理由)は4つある。→ ①注目②要求③逃避④感覚行動のぎっかけと、行動後の対応をABC記録すると分かる。
対人関係	問題行動	

図3 アドバイスのポイント

3 「相談対応の手引」の改善

(1) 相談受付シートの作成

現在、特別支援・相談課における相談は、相談者からの電話を受けたところから始まるケースがほとんどである。その際、相談者から聞き取った情報、主訴、伝えたアドバイスや来所予定等の方向性を記録するために活用しているものが、図4に示す相談受付票である。

この相談受付票に、特別支援担当から提案された「聞き取りのポイント」を取り入れた。さらに、聞き取りのポイントに加えて、従来の不登校に関する相談でこれまで活用してきた視点を組み込み、相談受付票を改善し、主訴を整理しながら必要なアドバイスを行うためのツールの作成を行った。それが、図5に示す相談受付シートである。

(来所・電話)相談受付票(初・再)

受付者	平成 年 月 日() 時 分 ~ 時 分
相談者	本人(保護者・担任・特コその他)
児童生徒名	男 女 歳
学校名	(保・幼・小・中・高・特) 年
連絡先	
主訴	区分()
相談内容	
対応	来談・連絡・即決
他機関との連携	
相談担当室	主担当 副担当(要 人、不要)
来所希望者	人 内訳()
相談予約日時	年 月 日() 時 分 ~
使用部屋	特1・特2・相1・相2・プレイ・ソフプレイ・相3・相4・視覚・聴力・心理



(来所・電話)相談受付シート(初・再)

受付者	平成 年 月 日() 時 分 ~ 時 分	
相談者	本人(保護者・担任・特コその他)	
連絡先		
児童生徒名	男 女 歳	
学校名	(保・幼・小・中・高・特) 年	
相談内容	観点	聞き取り内容
	運動面の発達 相対運動 複雑運動 協調性 言葉の発達 理解 発音 語彙量 対人関係 友だち トラブル ・内容・態度・場所 関わっていること 学力 全体的な学力 得意な教科 不得意な教科 特記事項 本人 好きなこと 嫌いなこと 関わっていること 自己理解 効果的な支援 幼少期の様子 現在 学校での様子 友だちの関係 トラブル 行事への参加 学校の対応 休み時間の過ごし方 教員との関係 支援体制 関わっていること 家庭での様子 過ごし方 ・活動内容・時間 ・過ごす場所・外出 友だち関係 家族の関わり 関わっていること 地域資源 療育 相談機関 習い事 その他 不登校 いじめ 児童生徒との関係 学校生活上の困難 無気力 身体的・情緒的困難 意図的な拒否 教員との関係 教員と・非行	
主訴		アドバイス

図4 相談受付票

図5 相談受付シート

(2) ナビゲートシートの作成

相談受付シートの聞き取り内容から不登校の背景にある具体的理由を的確に把握するため、特別支援教育の視点を取り入れたナビゲートシートを作成した。

作成のポイントとして、文部科学省の「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」の不登校の状況や長期欠席の状況等を参考に相談内容を分類した。さらに、実際の不登校を主訴とする電話相談において、不登校の要因として発達の偏りが考えられる場合や発達障がいの二次障がいとして、不登校になっている場合を見逃さず適切な支援ができるよう、特別支援教育の視点を分類項目に追加し作成したものが図6である。

作成したナビゲートシートを特別支援担当と教育相談担当で協議を行った結果、分類項目1～4の中にも発達障がいの可能性のある児童生徒が含まれており、その児童生徒を対象として相談を行うのであれば、分類項目の中に特別支援教育の視点を組み込む方がよいのではないか、家庭内の不和や保護者の叱責・言動への反発等が背景にあるケースも考えられるため分類項目に追加したほうがよいのではないかという2点の改善点が明らかになった。そこで、各分類項目の中に「行動や言動に偏りがある（発達障がいの疑い）」及び分類項目に「家族との関係」を追加し、改善したものが図7のナビゲートシート（改訂版）である。

(3) アドバイスシートの作成

相談者が求める具体的なアドバイスを行うために特別支援教育の視点とカウンセリングの視点を融合したアドバイスシート^{*1}を作成した（図8）。

作成のポイントとしては、相談者が求める子どもへの対応の要点を抜き出し、相談時に活用しやすくした。さらに、連携機関について、特別支援教育に関する連携機関と不登校に関する連携機関をともに取り上げ記載する

不登校の具体的理由について（該当する番号に○をつける）

1	他の児童生徒との関係（いじめ）	いじめを受けているため登校できない。	→	対応シート1
2	学校生活上の悩み（健康面の悩みを含む）	a クラスになじむことができないなどの問題で登校できない。他の児童生徒との関係（いじめを除く）	→	対応シート2
		b 授業がわからない。試験が続いてあるなどの上記以外の学校生活上の影響で登校できない。		
		c 無気力でなんとなく登校しない。登校しないことへの罪悪感が少なく、退会にいたり強く催促すると登校するが長続きしない。		
		d 登校の意志はあるが身体の不調を訴え登校できない。漠然とした不安を訴え登校しない等、不安を中心とした情緒的な混乱によって登校しない（できない）。		
		e 学校に行く意義を認めず、自分の好きな方向を選んで登校しない。		
3	教職員との関係	教職員との人間関係で登校できない。	→	対応シート3
4	あそび・非行	遊ぶためや非行グループに入ったりして登校しない。	→	対応シート4
※	行動等の特性がある	上記の内容にプラス、行動や言動に偏りがある（発達障がいの疑い）		
A	学習面	a 聞くことが苦手。	→	対応シート5
		b 話すことが苦手。	→	対応シート6
		c 読むことが苦手。	→	対応シート7
		d 書くことが苦手。	→	対応シート8
		e 計算することが苦手。	→	対応シート9
		f 推論することが苦手。	→	対応シート10
B	行動面	a 不注意。	→	対応シート11
		b 多動性。	→	対応シート12
C	対人関係	a 共感性が乏しく、相手の感情や立場が理解できない。	→	対応シート13
		b 友人関係を上手に築けず、一人になることが多い。	→	対応シート14
		c 常識が乏しい。	→	対応シート15
		d 協調性に欠け仲間と協力することができない。	→	対応シート16

図6 ナビゲートシート

不登校の具体的理由について（該当する番号・記号に○をつける。）

1	児童生徒との関係（いじめ）	a いじめを受けているため登校できない。	→	アドバイスシート1
		b 上記の内容にプラス、行動や言動に偏りがある。（発達障がいの疑い）		
2	学校生活上の悩み（健康面の悩みを含む）	a クラスになじむことができないなどの問題で登校できない。他の児童生徒との関係（いじめを除く）	→	アドバイスシート2
		b 授業がわからない。試験が続いてあるなどの上記以外の学校生活上の影響で登校できない。		
		c 無気力でなんとなく登校しない。登校しないことへの罪悪感が少なく、退会にいたり強く催促すると登校するが長続きしない。		
		d 登校の意志はあるが身体の不調を訴え登校できない。漠然とした不安を訴え登校しない等、不安を中心とした情緒的な混乱によって登校しない（できない）。		
		e 学校に行く意義を認めず、自分の好きな方向を選んで登校しない。		
		f 上記の内容にプラス、行動や言動に偏りがある。（発達障がいの疑い）		
3	教職員との関係	a 教職員との人間関係で登校できない。	→	アドバイスシート3
		b 上記の内容にプラス、行動や言動に偏りがある。（発達障がいの疑い）		
4	家族との関係	a 家庭内の不和、保護者の叱責、保護者の言動への反発等。	→	アドバイスシート4
		b 上記の内容にプラス、行動や言動に偏りがある。（発達障がいの疑い）		
5	あそび・非行	a 遊ぶためや非行グループに入ったりして登校しない。	→	アドバイスシート5
		b 上記の内容にプラス、行動や言動に偏りがある。（発達障がいの疑い）		

図7 ナビゲートシート（改訂版）

ことで、より相談者のニーズに応じたアドバイスができるように工夫した。このアドバイスシートは、教育相談担当が受ける不登校に関する相談において、特にニーズの高い「発達障がいのある子どもたちへの関わり方」や「問題行動の減らし方」等多岐にわたる特別支援教育の対応から抽出し、作成したものである。

IV 成果と課題

1 成果

過去2年間の研究において、不登校の背景にみられる発達障がいの特性に焦点を当て、相談者に対して、適切なアドバイスを行うことに目を向けてきた。しかし、「相談対応の手引き試作版」を検討する過程において、発達の偏りについての確に聞き取り、正しい見立てをすることの大切さを再認識するに至った。このことにより、現在の相談受付票に不登校の要因について聞き取るポイントを加えた「相談受付シート」、具体的な対応方法やアドバイスの要点を記した「アドバイスシート」、どの「アドバイスシート」へ進むのか明確にするための「ナビゲートシート」の作成に繋げることができた。これらのことから、当課の教育相談のスタート地点である電話相談に立ち返って考えたことは、教育相談の在り方を見直すよききっかけになった。

2 課題

今後は、「相談対応の手引き」を活用する中で、相談受付シート、ナビゲートシートの項目やアドバイスシートに書かれたアドバイスについて試行と評価を重ねて改善し、相談者にとっても相談担当者にとってもメリットのあるものとする必要がある。

そのために、次の3点に取り組んでいきたい。

- (1) 「相談対応の手引き」を活用した事例について、定期的に事例検討会を行う。

当課の2班からなる構成を活かしてカウンセリングの視点と特別支援教育の視点の双方から、相談者のニーズに応じた教育相談を行うことができているかを検討し、相談担当者の資質向上を目指したい。

- (2) アドバイスシートの充実に努める。

相談者のニーズは多種多様である。発達障がいへの対応についてさらに研究し、相談者の気持ちに寄り添った、より具体的な支援方法を提示していけるようにしたい。

- (3) 他機関との連携の方法について、研究や開発を進め、「相談対応の手引き」を追捕する。

福祉、医療等他機関との連携強化は不可欠であり、効果的な支援体制を構築するための研究を進めたい。

アドバイスシート2 学校生活上の悩み(健康面の悩みを含む)	
子ども自身が敏感すぎる心や強い不安を持っている可能性があり、集団生活になじみにくいことが考えられる。また、思春期の特性により、自己への不安や反発から急に高ぶる状態になる場合も考えられる。 高校生の場合は進級や卒業に直結するので、授業の欠席時数及び出席状況の確認と相談の状況を把握することが大切である。(担任から説明を受けること)→進級や卒業に対する考え方を当事者(本人)と行う。→進路変更や高卒認定試験等の情報を保護者に伝える。)	<input type="checkbox"/> 保護者自身の心の安定を図ること。(一人で抱え込まない。誰かに相談する等。) <input type="checkbox"/> 子どもをありのままに受け入れること。 <input type="checkbox"/> 子どもと雑談を心掛けること。 <input type="checkbox"/> 子どもに寄り添い、キャッチボールや散歩等、少し汗ばむ程度の運動を子どもと一緒にすること。(子どもの好きなことを認め、一緒に活動することも大切。) <input type="checkbox"/> 子どもが安心して過ごせる環境をつくること。(食事の配慮、清潔な生活、温かい雰囲気など) <input type="checkbox"/> 段階別不登校対応ハンドブックのp5、(3)段階別対応のヒント、保護者や家族の対応のヒント参照。 <input type="checkbox"/> センターへの来所相談を提案し、状況に応じては定期的な相談を勧める。
叱る事が多い	<input type="checkbox"/> できたことを褒め、子どものことを認めるなどポジティブな関わりを増やす。 <input type="checkbox"/> 注意や叱るだけでなく、どうすれば良かったかも教える。
失敗したとき	<input type="checkbox"/> お手伝いや頼み事をするなど褒める機会を設定する。
萎める事が多い	<input type="checkbox"/> 適切な行動が増えることによって、相対的に問題行動は減る。 <input type="checkbox"/> 適切な行動を見つけて、成功体験を積みあげる。 <input type="checkbox"/> 適切な行動ができてきたら、すかさず褒めて強化する。
問題行動	<input type="checkbox"/> 1日の過ごし方、好きなこと(ご褒美)、使える支援を聞き取ることによって指導の方向性が決まる。 <input type="checkbox"/> 一日や一週間の中で楽しみにできることを一緒に考える。 <input type="checkbox"/> カレンダー等に書き込み、いつでも見て確認ができるようにする。 <input type="checkbox"/> 家でゲームをしたり、好きなことをしたりして過ごすことは、本人にとってご褒美になりえる。「授業がある時間は寝ている」とか「家でも勉強をする」など学校に行った方が楽しいと思える過ごし方を心がける。 <input type="checkbox"/> 本人の役割を持たせたり、簡単な手伝いをさせるなど、できたときは感謝の言葉を伝え、家庭や学校で必要な存在であることを感じられると自信につながる。 <input type="checkbox"/> できたことをフィードバックする方法 <input type="checkbox"/> 言葉だけでなく、ジェスチャーや拍手、視線や表情使って伝える。 <input type="checkbox"/> ルールを守ることが大切にする。 <input type="checkbox"/> テレビはご飯を食べながら見る。 <input type="checkbox"/> 外から帰ったら手を洗う。 <input type="checkbox"/> 数は少なくてもいいので、守れたらしっかり褒めてあげる。
関わり方	<input type="checkbox"/> 生活リズムを整え、朝決まった時間には起きる、着替えや洗顔、本人に合わせた量の朝食をとるなど、家族も協力して小さい頃からしっかりと基本的な生活習慣を身につける。 <input type="checkbox"/> 暗黙の了解や状況理解が苦手 <input type="checkbox"/> 絵に描いて説明、状況を詳しく説明
基本的な生活習慣	<input type="checkbox"/> 生活リズムを整え、朝決まった時間には起きる、着替えや洗顔、本人に合わせた量の朝食をとるなど、家族も協力して小さい頃からしっかりと基本的な生活習慣を身につける。
状況理解	<input type="checkbox"/> 暗黙の了解や状況理解が苦手 <input type="checkbox"/> 絵に描いて説明、状況を詳しく説明
進路選択について	<input type="checkbox"/> 学校で相談できる人は?得意不得意を知りたい。 <input type="checkbox"/> スクールカウンセラー <input type="checkbox"/> 大学外の心理相談室 <input type="checkbox"/> 発達障がい者総合支援センター <input type="checkbox"/> 県教育委員会教職員課 <input type="checkbox"/> 特別支援 相談課の活用(来所相談、出張相談等) <input type="checkbox"/> 県警少年サポートセンター <input type="checkbox"/> 各市町村教育委員会 <input type="checkbox"/> 適応指導教室 <input type="checkbox"/> 精神保健福祉センター <input type="checkbox"/> 地域若者サポートステーション <input type="checkbox"/> 行政機関の福祉関係 <input type="checkbox"/> 青少年補導センター <input type="checkbox"/> 学校問題解決支援チームの活用 <input type="checkbox"/> 県立青少年支援センター <input type="checkbox"/> 学校での様子を見てほしい。 <input type="checkbox"/> 巡回相談員の活用 <input type="checkbox"/> 福祉的な相談をしたい。 <input type="checkbox"/> 相談支援事業所 <input type="checkbox"/> 行政機関の福祉関係 <input type="checkbox"/> こども女性相談センター <input type="checkbox"/> 家庭相談員 <input type="checkbox"/> 発達に気になる。得意不得意を知りたい。服薬を考えている。カウンセリングを受けたい。 <input type="checkbox"/> 医療機関の受診

図8 アドバイスシート

V おわりに

現在、不登校の要因や背景は多様化・複雑化しており、発達に偏りを伴う不登校児童生徒への対応も必要となってきた。また、当課は教員や学校を通じて紹介された保護者からの相談も多いことから、総合教育センターにおける特別支援教育と教育相談の専門性を兼ね備えた特別支援・相談課の果たす役割は、今後益々重要になると考えられる。さらに他機関とのパイプ役としての機能も果たすことができるように、研究や開発を進め、不登校児童生徒や保護者の多様なニーズに対応した相談活動の充実を図りたい。

*1 アドバイスシートはNo1～5で構成されており、本紀要においてはその一部を掲載する。

参考文献

- ・文部科学省「平成25年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」, 2013年
- ・徳島県教育委員会「段階別 不登校対応ハンドブック」, 2013年
- ・徳島県教育委員会「こどもたちを“いじめ”から守りぬくために」, 2013年
- ・文部科学省「不登校児童生徒への支援に関する最終報告～一人一人の多様な課題に対応した切れ目ない組織的な支援の推進～」不登校に関する調査研究協力者会議, 2016年
- ・文部科学省「不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）」, 2016年

資料

(来所 ・ 電話) 相談受付シート (初 ・ 再)	
受付者	平成 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分
相談者	本人・保護者・担任・特コ・その他()
連絡先	
児童生徒名	男 女 歳
学校名	(保 ・ 幼 ・ 小 ・ 中 ・ 高 ・ 特) 年

	観点	聞き取り内容
運動面の発達	粗大運動 微細運動 協調性	
言葉の発達	理解 会話 語彙量	
対人関係	友だち トラブル ・内容・頻度・場所 困っていること	
学力	全体的な学力 得意な教科 不得意な教科 特記事項	
本人	好きなこと 嫌いなこと 困っていること 自己理解 効果的な支援 幼少期の様子 服薬	
学校での様子	友だちの関係 トラブル 行事の参加 学校の対応 休み時間の過ごし方 教員との関係 支援体制 困っていること	
家庭での様子	過ごし方 ・活動内容・時間 ・過ごす場所・外出 友だち関係 家族の関わり 困っていること	
地域資源	療育 相談機関 習い事 その他	
不登校	いじめ 児童生徒との関係 学校生活上の問題 無気力 不安や情緒的混乱 意図的な拒否 教員との関係 あそび・非行	
対応	来談 ・ 連絡 ・ 即決	
他機関との連携		

主 訴	
	アドバイス

不登校の具体的理由について(該当する番号・記号に○をつける。)

1	児童生徒との関係 (いじめ)	a	いじめを受けているため登校できない。	→	アドバイスシート1
		b	上記の内容にプラス、行動や言動に偏りがある。(発達障がい疑い)		
2	学校生活上の悩み (健康面の悩みを含む)	a	クラスになじむことができないなどの問題で登校できない。他の児童生徒との関係(いじめを除く)	→	アドバイスシート2
		b	授業がわからない、試験が嫌いであるなどの上記以外の学校生活上の影響で登校できない。		
		c	無気力でなんとなく登校しない。登校しないことへの罪悪感が少なく、迎えにいたり強く催促すると登校するが長続きしない。		
		d	登校の意志はあるが身体の不調を訴え登校できない、漠然とした不安を訴え登校しない等、不安を中心とした情緒的な混乱によって登校しない(できない。)		
		e	学校に行く意義を認めず、自分の好きな方向を選んで登校しない。		
		f	上記の内容にプラス、行動や言動に偏りがある。(発達障がい疑い)		
3	教職員との関係	a	教職員との人間関係で登校できない。	→	アドバイスシート3
		b	上記の内容にプラス、行動や言動に偏りがある。(発達障がい疑い)		
4	家族との関係	a	家庭内の不和、保護者の叱責、保護者の言動への反発等。	→	アドバイスシート4
		b	上記の内容にプラス、行動や言動に偏りがある。(発達障がい疑い)		
5	あそび・非行	a	遊ぶためや非行グループに入ったりして登校しない。	→	アドバイスシート5
		b	上記の内容にプラス、行動や言動に偏りがある。(発達障がい疑い)		

アドバイスシート3 教職員との関係

まず、相談してくれたことをねぎらう。教職員に対して腹を立てたり、不信感をもったりしていることがあるので、これまでの出来事を整理し、何が一番問題か、何を学校に伝えていかを一緒に整理する。

- 子ども自身が敏感すぎる心や強い不安を持っている可能性があり、集団生活になじみにくいことが考えられる。その場合は一時的にストレス要因から離すことも大事。
- 思春期の特性により、自己への不安や反発から急に葛藤状態になる場合も考えられる。
- まずは、関係が悪化している教職員以外に信頼できる教職員へ相談することを勧める。困難なケース(体罰・暴言・セクハラ等)については市町村教育会や県教育委員会教職員課へ相談することも勧める。
- 子どもの傷つきが大きい場合は、医療や相談機関等の受診やカウンセリングを勧める。
- ケースに応じては、子どもが安心して登校できる環境を特別支援・相談課と学校間で連携を図ることが可能であることを相談者に伝える。
- センターへの来所相談を提案し、状況に応じては定期的な相談を勧める。

叱る事が多い できたことを褒め、子どものことを認めるなどポジティブな関わりを増やす。

失敗したとき 注意や叱るだけでなく、どうすれば良かったかも教える。

褒める事が少ない お手伝いや頼み事をするなど褒める機会を設定する。

問題行動 適切な行動が増えることによって、相対的に問題行動は減る。

→適切な行動を見つけて、成功体験を積みあげる。

→適切な行動ができてきたら、すかさず褒めて強化する。

関わり方 1日の過ごし方、好きなこと(ご褒美)、使える支援を聞き取ることでよ

って指導の方向性が決まる。

一日や一週間の中で楽しみにできることを一緒に考える。

カレンダー等書き込み、いつでも見て確認ができるようにする。

家でゲームをしたり、好きなことをしたりして過ごすことは、本人にとっ

てご褒美になりえる。「授業がある時間は寝ている」とか「家でも勉強

をする」など学校に行った方が楽しいと思える過ごし方を心がける。

本人の役割を持たせたり、簡単な手伝いをさせるなど、できたときは

感謝の言葉を伝え、家庭や学校で必要な存在であることを感じられる

と自信につながる。

できたことをフィードバックする方法

→言葉だけでなく、ジェスチャーや拍手、視線や表情使って伝える。

ルールを守ることを大切にする。

→テレビはご飯を食べてから見る。

→外から帰ったら手を洗う。

→数は少なくともいいので、守れたらしっかり褒めてあげる。

基本的な生活習慣 生活リズムを整え、朝決まった時間には起きる、着替えや洗顔、

本人に合わせた量の朝食をとるなど、家族も協力して小さい頃から

しっかりと基本的な生活習慣を身につける。

状況理解 暗黙の了解や状況理解が苦手

→絵に描いて説明、状況を詳しく説明

連携機関について

学校で相談できる人は？得意不得意を知りたい。

スクールカウンセラー

学校以外での相談機関は？

大学の心理相談室 発達障がい者総合支援センター 県教育委員会教職員課

特別支援・相談課の活用(来所相談、出張相談等) 県警少年サポートセンター

各市町村教育委員会 適応指導教室 精神保健福祉センター

地域若者サポートステーション 行政機関の福祉関係 青少年補導センター

学校問題解決支援チームの活用 県法務少年支援センター

学校での様子を見てほしい。

巡回相談員の活用

福祉的な相談をしたい。

相談支援事業所 行政機関の福祉関係 こども女性相談センター

家庭相談員

発達が気になる。得意不得意を知りたい。服薬を考えている。カウンセリングを受けたい。

医療機関の受診